

千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展 7月18日(金)～8月24日(日)

開館時間／9:00～17:00(入館は閉館30分前まで)
初日10時開館
休館日／7月22日(火)・28日(月)・8月4日(月)・18日(月)
夜間開館／会期中毎週金曜日は19:00まで開館
会場／岡山県立美術館地下1F展示室

千葉市美術館は、江戸時代絵画、江戸～昭和初期までの版画を数多く収蔵する中で、こと浮世絵に関してはその全体像を把握できる内容となっており、公立館としては日本屈指の浮世絵コレクションを誇っています。浮世絵の祖と言われる菱川師宣が房総出身であることも、浮世絵が収集の重点となった理由の一つです。

「浮世絵」は江戸時代の町人社会を中心に、庶民の好みや流行に合わせ、多くは木版で量産され盛行しました。一方で、近世風俗画の流れを受け継いだ1枚ものの絵も描かれ続け、これらは「肉筆浮世絵」と呼ばれます。浮世絵で描かれる美人画・役者絵・風景画といった主題は、当時の時代の先端をいく風俗を表現したものです。浮世絵の持つ異国趣味・明るい色調・平面的な構成は、印



高橋北斎「富嶽三十六景 凱風快晴」 歌川広重「東海道五拾三次之内 庄野」



東洲斎写楽「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」 喜多川歌麿「当時三美人」

関連事業
記念講演会／千葉市美術館所蔵 浮世絵の魅力
講師／大和文華館館長〔前千葉市美術館学芸課長〕浅野秀剛氏
日時／8月10日(日)14:00～
会場／2Fホール 聴講無料・先着順(定員210名)
ワークショップ／「浮世絵を使って、江戸時代の遊びを体験しよう
すころく・きせかえ・組み上げ」
日時／毎日曜日 10:00～12:00
会場／屋内広場 申込不要・参加費無料

近代備前の創造 藤原啓・雄父子展 7月18日(金)～8月24日(日)

開館時間／9:00～17:00(入館は閉館30分前まで)
休館日／7月22日(火)・28日(月)・8月4日(月)・18日(月)
夜間開館／会期中毎週金曜日は19:00まで開館
会場／岡山県立美術館2F展示室

このたび、岡山県立美術館では、ご遺族のご協力を得て、特別企画「近代備前の創造 藤原啓・雄父子展」を開催します。藤原啓(1899～1983)は、若い頃、文学を志して上京、多感な青・壮年期を過ごしましたが、文学者としての限界を感じ、帰郷。失意の啓に、地元の国文学者正宗敦夫が備前焼を勧め、40歳にして、備前焼作家として歩み始めました。作品は、簡素ですっきりとしたものが多く、穏やかな詩情が感じられます。啓の長男に生まれた藤原雄(1932～2001)も父と同様、文学者を夢見、明治大学文学部に進学。卒業後、出版社に勤めましたが、小山富士夫の勧めに応じ帰郷、父について備前焼を始めました。諸外国の大学から招待され、備前焼の講義をしたり、積極的に弟子を受け入れるなど、備前焼の国際化、振興に努めました。また大型のレリーフ作品を手がけるなど活動の場を広げました。親しみやすい人柄と大らかで存在感のある作風は、多くの人に愛されています。本展は、戦後、備前焼の近代化に大きな足跡を遺し、父子そろって人間国宝となった藤原啓・雄の魅力あふれる造形世界を、約150点の作品により紹介します。



藤原 啓「備前甕」



藤原 雄「備前水指」



「桃太郎絵巻(部分)」江戸時代(18世紀)紙本着色

刊行物のご案内

中高生のための『岡山の美術』坂田一男と国吉康雄

中高生のためのシリーズ第3弾。今回は坂田一男と国吉康雄を取り上げました。この二人、同じ年に生まれ、岡山高等小学校に学んでいる同級生なんですね。さらに文学者の内田百閒も同じ年に生まれていてやはり岡山高等小学校に学んでいます。岡山を代表する三人の芸術家が岡山市の中心部、旭川のほとりに生まれ育っていることに、興味をひかれます。このことを少し書いてみました。

洋画担当の学芸員として二人の画家との付き合いは20年以上になりますが、近年は県民性という視点から見てみようと考えようになりました。きっかけはアメリカの国吉研究者との付き合いです。当然のことですが彼らには画家が育った地域の風土や文化の違いというものが充分見えていないと感じたからです。県民性というのは、とらえどころがないという面もありますが。岡山県からは、いろいろな分野で、従来の考え方にとらわれず新しい活動をした人々が多く出ています。国際的な視野を持った人物が多いことは、中国・四国地方の交差点という開かれた土地が国際的な感覚を持った人材を生むのに適していたためとも考えられます。坂田も国吉もそういう視野の広さを持った人物です。

新発見の事柄や研究成果も盛り込んでいますので、中高生に限らず二人のファンの方々はもちろんのこと、大勢の方々にぜひお読みいただきたいと思っています。
【学芸課長 妹尾克己】



平成20年度 特別展、岡山の美術展などのご案内

特別展(地下1F展示室)

柚木沙弥郎一わきあがる色と形
5月27日(火)～6月29日(日)

千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展
7月18日(金)～8月24日(日)

特別企画(2F展示室)

近代備前の創造 藤原啓・雄父子展
7月18日(金)～8月24日(日)

岡山の美術展(2F展示室)

国吉康雄ベストセレクション
5月21日(水)～7月13日(日)

現代美術の作品から

一寺田武弘・しばたゆり一
5月21日(水)～7月13日(日)

国吉康雄の版画と素描

8月26日(火)～10月3日(金)

大正・昭和の油彩画

8月26日(火)～10月3日(金)

テーマ展(2F展示室)

古典・物語絵の世界展

5月21日(水)～6月29日(日)

柚木家をめぐる画家たち

一柚木玉邨・久我少年・柚木久太一
5月21日(水)～7月13日(日)

版画の表現と技法

7月18日(金)～8月24日(日)

満谷国四郎

8月26日(火)～10月3日(金)

特集展示(2F展示室)

小山富士夫の陶芸

7月1日(火)～13日(日)

※詳しくは平成20年度展覧会スケジュールリーフレットでご確認ください。

美術館講座

●6月21日(土) 講師／廣瀬就久(学芸員)
特別展「柚木沙弥郎一 わきあがる色と形一」関連
柚木沙弥郎一型染めから広がる世界一

○7月26日(土) 講師／福富 幸(学芸員)
特別企画「近代備前の創造 藤原啓・雄父子展」関連
工芸基礎講座 備前焼

○8月16日(土) 講師／中村麻里子(主任学芸員)
鍛形順斎(北尾政美)について一浮世絵師にして津山藩御用絵師一

時間／14:00～15:30(開場は13:30) 聴講無料
会場／●2Fホール(定員210名)○B1F講義室(定員70名)

美術の夕べ

◆6月27日(金) 講師／廣瀬就久(学芸員)
特別展「柚木沙弥郎一 わきあがる色と形一」をみる

◆7月25日(金) 講師／中村麻里子(主任学芸員)
特別展「千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展」をみる

◇8月22日(金) 講師／福富 幸(学芸員)
特別企画「近代備前の創造 藤原啓・雄父子展」をみる

時間／18:00～19:00 会場／◆B1F展示室 ◇2F展示室
※各展覧会のチケットが必要です。

編集後記

美術館ニュース81号をお届けします。今号より編集担当となりました。変わらずご愛読いただければと思います。今年度は当館開館20周年という節目の年。「建築家岡田新一と岡山県立美術館20年」といった特別展や、当館の歴史や収蔵作品について出題した「県美検定」の実施など、20周年を盛り上げる企画が春から目白押しでした。本紙でも紹介した2名の新加入学芸員のパワーも加えて、この記念すべき年を走り抜いてゆきたいと思っています。どうぞ、二十歳を迎えた岡山県立美術館をこれからもよろしく願っています。
【S.T.】

美術館ニュース 第81号

発行：2008年6月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市天神町8-48
TEL：086-225-4800
URL <http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html>
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

「シャガールとパリ、そしてエッフェル塔」

マルク・シャガール (Marc Chagall,1887-1985)。97年もの人生をおくったこの画家のことが、頭について はなれない。今秋に展覧会を控えていることもあって、文献にあたりたり、画集を眺めたり、方々へ出向いたりしている。

そんな折り、シャガール展が国内で開かれていることを知って、さっそく出かけてきた。「シャガール展―色彩の詩人」(4月12日～5月25日、静岡県立美術館)である。この展覧会には、1949年に閉鎖されたモスクワの国立ユダヤ劇場のために制作した壁画で現存している7点すべて出品されている(残念ながら、緞帳と天井画は、劇場移転の際に失われてしまったという)。2002年に当館で「シャガール展」を開催した際にこれらの壁画を展示しているが、筆者は今回初めて見る事ができた。かつてユダヤ劇場で配置されていた順序にならって壁画を並べていて、劇場を復元した小型模型もあわせて展示されていることから、在りし日の様子を想像させる。なかでも《ユダヤ劇場への誘い》(1920年)は、284×787cmの大壁画で、明るい色彩、円弧や三角形などの幾何学的図形に囲まれた構図で、画家自身をはじめ舞台監督や俳優などの実在する人物が、実に生き生きと迫力をもって眼前に迫ってくる。

シャガールと同じ時代、エッフェル塔を繰り返し描いた画家として忘れられないのが、ロベール・ドローネー (Robert Delauney, 1885-1941) だ。《カーティフ・チーム》(1912年頃、パリ市近代美術館)、《エッフェル塔》(1926年、パリ市近代美術館)といったドローネーの絵画の数々。エッフェル塔に観覧車といった近代生活を、透明な明るいオレンジ色や黄色で描いたその作品は、詩人アポリネールによって「オルフィスム」と命名された。

シャガールの《大観覧車》は、このドローネーの色彩に近い。また、観覧車の円は、《アポリネール礼賛》(1911-12年、アイントホーフェン市立ファン・アッペ美術館)と通ずる。この《アポリネール礼賛》にはまた、人物表現にキュビズムの影響が見られ、若き日のシャガールが、アポリネールやドローネーといった芸術家たちとの交流のなかで、当時の芸術動向を視野に入れつつ、自己の表現方法を探っていた様を見て取れる。それにしても、この時期のパリには、実に多くの芸術家が住まい、多くのismが生まれていた。「エコール・ドパリ」を生み出したパリの懐の深さをあらためて思う。

波乱に満ちた生涯、生み出されたたくさんの作品群をまえにして、シャガールにどう接したらいいのか、正直なところ思いあぐねていた。けれども、このフランスとの出会いから考えてみたらどうなるだろう。フランス、もしくは端的に言って、「Paris―パリ」。

ヴィテブスク (現ベラルーシ) 生まれのこの画家がはじめてパリに足を踏み入れたのは1910年のことで、滞在先として選んだのはモンパルナスの「蜂の巣」だった。異国から来た貧しい若者にとって、お金がなくとも暮らすことのできる集合アトリエ「蜂の巣」は好都合なものだった。最初のパリ滞在は1914年までで、ヴィテブスク帰省中に第一次世界大戦が勃発したため、パリに戻る事ができなくなってしまう。ふたたびパリに足を踏み入れるのは1923年。けれども、やがて迫り来る第二次世界大戦をまえにして、ナチスの迫害を逃れるため、1939年に南仏のゴールドを経て、1941年にニューヨークへと移住する。

「柚木沙弥郎―わきあがる色と形」

6月29日(日)まで開催

開館時間 9:00～17:00(金曜日は19:00まで)
観覧料 一般800円、65歳以上・高生400円、小中生200円

現在当館では、岡山ゆかりの現代作家を紹介する展覧会として、柚木沙弥郎 (ゆのき さみろう) 氏の展覧会を開催中です。

柚木沙弥郎氏は、1922年に東京・田端の文士村に生まれました。柚木家は、倉敷市玉島の旧家で、祖父・玉郎とその弟・小年は南画家、父・久太は洋画家として知られています。



《萌》1992

芸術的な環境に恵まれながら育った氏は、当初東京大学で美学美術史を学びますが、戦後まもない頃、父の生家に近い大原美術館で、芹沢銈介の染色作品と柳宗悦の民芸論に出会い、啓発を受けることとなります。そして芹沢に師事しながら、染色への道を歩むことになりました。

柚木の仕事の基本は、模様を型紙に刻み、防染糊を

いる。詩書画に秀逸な、近代文人画的な中川一政にひかれていた。

高校時代には美術とともに文学も好きであった僕は、一日一冊文庫本を読むほどに乱読していた時期があり、大学の同窓生とともに文学同人誌を作っていた。生かじりの実存主義哲学をふりかざして、行動だ実践だ思想だ芸術だと、新宿の酒場で議論に耽り、若さの特権をふりかざしていた。

威勢ばかりがよい学生生活のなかで、海外に出る機会に恵まれて東南アジアを旅行した体験と、読売アンデパンダンに代表される1960年代を過激に生きている現代美術との出会いは衝撃であった。

僕らは何をやっているのかとの疑問が、僕らが生きてきた近代とは何か、日本の近代とは何なのか。僕が魅かれる近代の文学や芸術とは何なのかを考えはじめたところから、近代の日本美術を勉強しはじめた。

以上のように、短絡的に整理し回顧してみた。(次号につづく)

【館長 鍵岡正謹】

|表紙|の|作品|

鍵岡館長の

美術の記
体験

大学入学で東京し何より嬉しかったのは、本物の絵画作品がみられることであった。上野にゆ

けば、東京国立博物館で日本の美術が、国立西洋美術館では近世や近代の西洋美術が、都美術館では四十年前には盛んだった諸団体の有名画家たちの新作がみられる。東京八重洲から新橋まで歩けば、プリヂストン美術館があり、鎌倉にある神奈川近代美術館とともに僕が多分に影響をうけた京橋の東京国立近代美術館があり、大小の画廊では画家たちが作品を発表している。作家たちに会うと、めらめらと油絵を描きたい気持が昂まる。奈良高校の美術クラブに一年後輩に絹谷幸二がいて、東京芸大に入学し早くも独立展に入選していた。彼の抜群の描写力に圧倒されていたが、油絵を描きたくて慶応大学パレットクラブに所属した。福沢論吉が創設にかかわったという伝統ある美術クラブで、授業はその中でアトリエに通い制作に精をだし、ついには中川一政の門をたたいて絵をみてもらい、今では最後の弟子と自称して

近頃の美術館

ニューフェイス紹介

今年度4月より当館学芸課に2名の学芸員が加わりました。ニューフェイスをご紹介します。



このたび県立博物館から美術館へ転勤して来ました。19年間勤務した博物館は美術館から鶴見橋を渡ってすぐの所、今住んでいる所から美術館までの通勤時間は3分ほど長くなりました。通い慣れたはずの通勤ルートですが、あらためて周囲を眺めると市内には高層のマンションが増えているし、橋の幅も広がったし、毎朝散歩していた大きなワンちゃんにもいつの頃からか会わなくなり、人も街も少しずつ変わっていたのだなあ、とあらためて思ったりしています。(本当の年齢は個人情報なので明かせませんが) 人生の折り返しもたぶん過ぎてんだらうなあ、などと思うにつけ、この美術館で過ごす日々がどういうものになるか、不安ながらも結構楽しみなどころもあります。何につけ「変わる」ことが要求される今の世ですが、ほっといても変わるものはたくさん、その証拠にかつて旅行が大好きだった自分が、最近では家にいるのが何より幸せと思うようになりました。これから何が好きになってくるか、この環境の変化によってそういう変化自体を観察する態勢になっています。

【主任学芸員 中田利枝子】

"CONNECT"

私は、中学校の教育現場に美術科の教員として十数年間携わらせていただきました。教育の現場を少しでも知る私が、美術館というところを仕事場にするという意味は何なんだろうか。この転勤で、私が一番感じているのは"CONNECT"ということです。私の人生の中で出会った様々な出会いは、その時その時の出会いで言い換えれば「点」のようなものだったと思います。その点と点(出会いと出会い)が、この美術館への転勤をきっかけにもすごい勢いでつながり始めています。つまり"CONNECT"され、私のまわりでうごめき始めています。2年前、「mitel おかやま」のナビゲートスタッフの一人として、美術館に関わせていただいたときに、頻繁に使われた"CONNECT"という言葉の意味するところを、今実感として感じる事が出来ます。今度は私が、美術館の教育普及を通して、皆様に"CONNECT"を提供できる仕事が出来ればと心が引き締まる思いです。

【学芸員 岡本裕子】



「それじゃ、いま、とくになにもやってないんですね」「はあ、特別展はやっておりませんが……」「こんど、何かやるのはいつですか?」「…………」

吉中充代「所蔵品の見せ方」
『変貌する美術館―現代美術館学II―』昭和堂 2001

美術館にとって、コレクションはまさに「命」といえるものです。特定の時代や作家についてどれほど多く、また系統的に収集されるかは、美術館を評価する一つの尺度でもあり、その美術館の個性や特色を示すものです。当館のコレクションは、日本画では雪舟とその周辺を概観できる作品群のほか、宮本武蔵、浦上玉堂など水墨画の優品や、江戸時代の岡山四条派から小野竹喬、池田蓬邨など近現代の作品を擁しています。洋画では松岡寿、原田直次郎ら明治期の秀作や、渡米し彼の地で活躍した国吉康雄、日本における抽象画の先駆者坂田一男など、特色のあるコレクションとなっています。今後「岡山の美術展」で、それら当館コレクションの新たな魅力を発見していただけるでしょう。

【学芸員 齋藤武郎】

岡山 の 美術展 ここ に 注目

当館では、今年度より「常設展」という名称を「岡山の美術展」に改めました。もちろん名称を変えただけではなく、当館の収蔵作品についてさまざまな切り口からテーマを設定し、これまで以上に郷土ゆかりの作家や作品について紹介する展示にしてゆきます。

美術館で開催される展覧会は、総じて「特別展」と「常設展」に分けられるでしょう。そして、日本の場合、美術館に行くというのは「特別展を見に行く」という感覚ではないでしょうか。国内外から集められた、まばゆいばかりの作品で構成される特別展を開催する東京国立博物館では、平成館に行列ができて、本館に行列ができることは稀でしょう。

日本の美術館における常設展の現状を説明するエピソードに以下のようなものがあります。

「いま、美術館で、なに、やってますか?」「はい。常設展を開催しております」「えっ、ジョーセツテン、ってなんですか?」「館蔵品の展示で……」「カンゾー??それはどういうもの?」「あーつと、この美術館が所蔵している作品の展示で、具体的には……」

作者不詳 (野野派)

「桃太郎絵巻」二巻

〔江戸時代 十八世紀〕

〔紙本墨画〕

〔五六八×九六九(二折)〕

〔五六八×九七九(一折)〕

〔五六八×九七九(一折)〕

桃太郎に関しては全国各地にさまざまな由来や伝説があるが、なかでも岡山では桃、吉備団子、桃太郎の昔話の原型とされる「吉備津彦命の温羅退治」伝説の三つがそろった最有名伝説地であり、早くから当地のシンボルとして愛されてきた。本絵巻は桃太郎話を図像化したものとしては最も早い十八世紀前半の本格的な作例である。筆者は不詳とはいえ、人物表現や岩の特徴から狩野派に属する画家の手になるものと判断される。桃太郎の生家の描写をはじめ技巧的に優れた表現から当時有数の絵師が

関与したのであろう。

巻頭部分には、川に洗濯に行った婆が桃を拾う場面が描かれ、続いて桃太郎の誕生シーンが現れる。川には果生型(桃太郎が桃から生まれる)が主流であるが、この作品は回春型(爺婆が桃を食べて若返り、桃太郎を産する)であり、江戸時代はこちらのほうが主流であった。

【主任学芸員 中村麻里子】